

頭部外傷後遷延性意識障害例に対する鍼治療 —脳賦活試験(PET)を含めた検討—

¹木沢記念病院・中部療護センター 脳神経外科、²木沢記念病院 中部療護センター 医療技術部、

³木沢記念病院 中部療護センター 看護部

○松本 淳¹、浅野 好孝¹、竹中 俊介¹、奥村 竜児²、遠山 香織³、西山 紀郎²、福山 誠介²、篠田 淳¹

【緒言】交通外傷による脳挫傷、瀰漫性軸索損傷(DAI)により遷延性意識障害を呈した1症例に対して意識障害及び下肢の緊張亢進の軽減目的にて鍼治療を行い、臨床症状の変化について検討した。また、 $H_2^{15}O$ -PETによる脳賦活試験を試みた。

【症例】41歳男性。受傷後20ヶ月より鍼治療を開始した。開始時GCS：E4VtM4で、両下肢を中心とした著明な筋緊張亢進を認めた。脳MRIにて、左後頭葉から頭頂葉にかけての脳挫傷、脳室拡大、瀰漫性軸索損傷を認め、FDG-PET及びECD-SPECTにて、左後・頭頂・側頭葉、帯状回、視床、脳幹、前頭葉内側、眼窩回等に糖代謝や血流の低下を認めた。

【治療及び評価】1) 週2回5ヶ月間の鍼治療を行い、臨床症状の観察とともに、治療前後の関節可動域(ROM)、Modified Ashworth Scale (MAS)により下肢の緊張状態を評価した。2) 安静時と水溝穴、合谷穴、足三里穴、太衝穴の鍼刺激時の変化について $H_2^{15}O$ -PETによる脳賦活試験を行った。

【結果・まとめ】1) 鍼治療中に、開眼の持続や追視・注視の明瞭化、呼びかけに対する笑顔の増加などの反応を認めた。毎回の鍼治療直後に下肢の筋緊張が緩和し、有意なROMの拡大とMASの減少も認め、鍼治療が有用であった。2) 鍼治療中に脳幹や左体性感覚野、前頭葉眼窩回、島などの一部に有意な血流増加を認めた。これらの脳賦活部位は、本症例の脳循環代謝の低下部位と一部一致する部位もあり、脳血流増加が鍼治療効果の一助となった可能性が示唆された。